

第69回特別例会(東京にて)

戦後六十九年ぶりに未公開写真でたどる樺太のポーランド人の旅路

# 樺太時代に生きた ポーランド人

講演会

～彼らはどこから来て、いかに生き、  
そして、どこへ帰ったのか～



講師 尾形 芳秀

(北海道ポーランド文化協会会員)

日時：2014年6月28日(土)  
14時～16時  
場所：駐日ポーランド共和国大使館  
(東京都目黒区三田2-13-5)

参加希望者は6月20日(金)まで  
に以下へご連絡ください。

携帯:090-6447-1700(佐光);  
メール:ssamitsu@hotmail.com

入場無料

本年2月にコザチェフスキ駐日大使が札幌にみえて、道庁赤レンガ庁舎の樺太関係資料館で  
樺太残留・亡命ポーランド人の記録を見学されたのがきっかけとなって、東京での講演会が実現し  
ました。稀な機会ですので、在京会員のみならず多数ご参加いただき、懇親の機会ともしたい  
と思います。また北海道の会員のみならずには、首都圏のお知り合いをこの催しにお誘いいただ  
ければ幸いです。さらに、お誘いできる個人、団体の情報をいただければ、事務局より直接チラシ等  
を送らせていただきます。よろしくお申し込み申し上げます。  
会長 安藤厚

※詳しくは、同封のフライヤーをご参照ください。



豊原高等女学校に学んだポーランド女性

日本時代の樺太にポーランド人がいたことは  
ほとんど知られていない  
わずかに残されている日本の公式資料を  
読み解いたものはみかけられない  
母国から1万キロ以上も離れた樺太に  
彼らは なぜ、残留の道を選んだのか  
なぜ、日本人と共生したのか…

日本とポーランドの交流史の空白を  
今、明らかにしたい…



小沼のチェハンスキ家のログハウス



樺太時代のポーランド人の結婚式

後援:



はじめての東京例会 大成功！

# 樺太時代に生きたポーランド人

～彼らはどこから来て、  
いかに生き、どこへ帰ったのか～

尾形 芳秀



日本とポーランドの間には過去数々の交流の歴史があり、それが今日まで受け継がれ発展していることはよく知られている。そこに共通するのは、人間としての心の絆であろう。しかし、その経緯には、何か欠落があるようにも感じられる。私は、それは樺太時代に日本人と共生したポーランド人のことではないかと思う。単にポーランド人のことだけではなく、日本史のなかで、樺太時代のことは欠落部分だと思われる。

樺太時代のポーランド人のことが知られていないのは、それ以前、この島は帝政ロシア領で、そこに残留していた人々は日本の敵国ロシア人と看做されていたことや、この島はシベリアに次ぐ流刑の島だったことにも起因している。この島にいたポーランド人は、多くが政治犯だった流刑囚だけではなく、ロシア軍の傭兵や各ポスト(監視所)の監視人もおり、これらの人々は母国が分割統治されていた時代に、生きるための止むを得ない選択肢だった。

この報告は、日露戦争後に日本領樺太に残留を希望したポーランドの人々と、ロシア革命後に北サハリンから亡命した人々が、異国の地で如何に生きたかを調べたものである。

樺太史のなかで、これまでこのテーマで発表されたものは、断片的なものだけで、全体像は見られない。近年発行された『日本・ポーランド関係史』(エヴァ・パワシュニルトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル共著、彩流社、2009)という 300 ページ超の大著にも、樺太時代のポーランド人についての記述はたった一行半しかない。日本にもポーランドにも資料がないためだろう。

この調査は、文字通りゼロからのスタートであった。断片的な資料や手記から調べ始め、当時の彼らを知る人々に聞き取り調査を行い、彼らの消息を探し、彼らに対してオーラル・ヒストリーを試みて、漸く発表することが可能となった。全体像が判明してからもう 10 年以上も経過したが、この間も検証を続け、発表の機会をうかがっていた。彼らがポーランドだけでなくヨーロッパ各地で立派に社会に貢献していたこともあり、発表を控えていたのである。

ここには彼らから提供いただいた貴重な写真がある。この一枚一枚から、彼らの思いを感じとっていた

## おがた よしひで

1937年、樺太・豊原市生まれ。豊原にはロシア風の丸太小屋が点在し、ポーランド人家族も住んでいた。戦後まで豊原で過ごし、ポーランド人と同じ地区に住み、遊び、同じ学校で学んだ。最近では、郷土史家として樺太に関心を持ち、樺太豊原会機関誌『鈴谷』(すずや)の編集に携わってきた。

だきたい。第二次世界大戦後の混乱のなかでこれだけの写真を持ち帰ったのは、稀有なことといえる。彼らと共通の思いは、彼らもまた祖父母の足跡を辿っているということだ。ともに樺太時代の戦前・戦後を体験した者として、彼らの生きざまには教えられるところが多かった。今こそその歴史の空白を埋めたいと思う。

## 1. サハリン島時代(1875-1905)から樺太時代(1905-45)へ

この島は、1875年までは北方少数民族や樺太アイヌが自然豊かに暮らす島で、同時に日ロ混住の地でもあった。それが1875年の樺太・千島交換条約によりロシア領となってからは、シベリアに次ぐ流刑地となり、帝政ロシアが統治する多くの国々の人々が流刑になってきた。多くは独立のために蜂起した人々や、それに影響を与えた人々だった。この島に来たのは、シベリアよりは罪状が軽微で、主に島の開発を目的とした流刑囚だった。



写真1 リュボウエツキ家の結婚式に集まった樺太のポーランド人たち、豊原の天守公会堂、1925年頃

## 2. ポーランド人流刑囚の動向

1875年以降、サハリン島南部でも流刑の受け入れ準備が進められ、1880年頃からコルサコフ監獄への収監が始まった。この監獄にはロシア人のほか、ポーランドなどロシアに統治されていた国々の人々も送られてきた。悪名高いコルサコフ監獄では、劣悪な環境のなかで囚人たちが強制労働に従事させられ、体力の劣る者に鞭打ちなどの体罰が続けられていた。

この状況を冷静に見て、同胞を何とかこの境遇から救出しようと、原始の森の開拓に志願する計画を実行したのが、元ポーランド軍騎兵でワルシャワ県出身のフランツ・チェハンスキ(Franz Ciechański)である。彼の行動のおかげでサハリン時代や樺太時代に同胞は生き延びることができた。彼は、監獄に収容されている同胞のなかから、開拓に耐えられそうな者や特技のある者を15名ほど選抜し監獄を離れる。彼の功績は、不毛の地ノヴォ・アレクサンドロフスクにポーランド人の集落「ワルシャワ村」を造り、小さなカトリック教会を建てたことである。彼は本国から妻を呼び寄せ、たくさん子供を育て、同胞に娘たちを嫁がせた。

## 3. 予期せぬ日露戦争

1905年、この地にも日露戦争が及び、島の流刑囚に大きなインパクトを与えた。当時この島では刑期を終えても解放されることはなかったが、日本軍の侵攻により、この島の流刑制度は一举に解体され、流刑囚だった人々は解放された。とはいえ、大半は沿海州のデカストリへ強制送還されるはずだった。

日露の戦後協定ではこの島の人々は希望すれば残留も可能とされたが、実状は、コルサコフ以北の集落は焼き払われており、残留するにも家もなく食料も皆無の状態だった。この最悪の状態でも、多くのポーランド人にも強制送還の恐れがあったが、彼らはチェハンスキの機転で今まで通りの生活が約束されたのである。彼は同胞に対し、この戦争ではロシアの傭兵とならず、日露どちらにも加担しないよう、適切に指示したことにより、同胞を二度も守ったのである。彼らはロシア軍の降伏後、日本軍に物資の輸送等で協力し、それが日本軍から評価されたのである。

大半のロシア人の強制送還が終わったころ、チェハンスキは後継のリーダーにユゼフ・ジェヴスキ(Józef Rzewuski)を指名する。この男はミンスク郊外のシュラフタの出身で、コルサコフに流刑になると、すぐにチェハンスキのいるノヴォ・アレクサンドロフスクに単身で入植し、丸太小屋を自力で造り始め、何年もかけて大きな家にした。日露戦争の前に結婚し、ウラジミロフカ(後の豊原)に移住し、日露戦争の南部戦線の目撃者となった。日本領となったころ、彼は樺太庁の先

遣隊の住まいの向かいに住んでいた。間もなくこの地の南側に樺太庁の新首都が建設される。

1907年、樺太庁発足のとき樺太の残留ロシア人を調査した記録によれば、強制送還後の残留者は91名、うちポーランド人は32名、ロシア人は37名、他の22名は7カ国に及んでいた。正式な残留者はポーランド人だけで、他は強制送還時に山野に隠れて出頭しなかった人々とみられる。

ジェヴスキは教会をノヴォ・アレクサンドロフスク(後の小沼)から首都となった豊原に移転新築し、この教会(天守公会堂)は、樺太時代のポーランド人たちの拠り所となり、子供たちの母国語教育の場として利用され、何度か建て替えて大きな教会になった。彼はこの教会の後援会長的な存在で、大家族でありながら私財を投げ打って拡充に尽力した。彼は、樺太の学校で外国人の受け入れが可能となったとき、率先してポーランド人の子供たちを学ばせた先駆者でもあった。また彼は後から入植してきた日本人に、北方圏の牧場経営の手法や屠殺の技術を伝授した。



写真 2 豊原高等女学校に学んだポーランド人フランシユカ・ジェヴスカ(愛称フラーニャ:左端)、1930年

## 4. 「樺太波蘭人会」の設立

1905年当時、彼らはポーランド人と正しく認識されていたが、1930年頃には、樺太在住の残留人は全てロシア人とか白系ロシア人とか呼ばれていた。これは、ロシア(ソ連)と国境を接する島であったことから、ロシアのスパイが何度も南へ潜入し、国境を挟んで小競り合いが続いていたため、主にロシアからのスパイを警戒した官憲が、島民に警戒させるためにとった措置であり、在樺のポーランド人にとっては苦悩の日々となった。彼らの子供たちは日本の学校で学んでいるのに、このような差別を受けるのは決して容認できないことだった。危害が加えられることはなかったが、「ロシア人」と呼ばれるのは耐えられないことだった。

特に一度に38名ものソ連のスパイが日本の官憲に逮捕された事件以降、スパイの潜入先は残留ロシア人宅と注意喚起がなされ、在樺の外国人は不自由な

生活を余儀なくされた。

そこでポーランド人たちはロシア人との差別化を図るため「樺太波蘭人会」を作ることにした。1937年、在樺のポーランド人たちは二代目リーダーのジェヴスキ宅に集まり協議し、投票の結果、白浦に住む亡命ポーランド人アダム・ムロチコフスキ(Adam Mroczkowski)を会長に選出し、警察署に会の設立届けを提出する。これまでリーダーは任意に継承されてきたが、このとき初めて選挙で選出された。彼は亡命後から同胞や地元民の信頼の厚い人物だった。このようなコミュニティを作ったのはポーランド人がはじめてだったので、この会の発足は日本の官憲を刺激した。

1941年末、太平洋戦争が勃発し、官憲の警戒はさらに厳しくなった。日露戦争では何かと貢献したにもかかわらず、いつの間にか「ロシア人」と呼ばれることは、彼らにとって予想外のことだった。

この時期、どこで戦争の気配を察知したのか、密かに樺太を離れるロシア人がいた。日本の治安当局は、厳しい監視とは裏腹に、情報収集は未熟だった。官憲は、樺太のロシア系外国人の全てを「米国の攻撃から守るため」と称して、豊原市の南東部にある上喜美内地区に秘密裡に隔離する。当時ほとんどの島民はこの事実を知らなかった。ソ連軍は侵攻すると、逸早くこの地区に入り隔離された人々を解放した。

## 5. 二度目の解放

ポーランド人たちは僅か40年間の樺太時代に、日本とソ連に二度も解放されるというめまぐるしい体験をすることになった。1945年、ソ連軍が島の南部を制圧すると、日本軍や官憲を取り調べる際の通訳として、残留ポーランド人を徴用する。彼らの多くはポーランド語よりもロシア語をよく話し、しかも日本の教育を受



写真3 豊原旧市街のジェヴスキ家の結婚式、(前列左端) 二代目リーダー・ユゼフ・ジェヴスキ(新郎ウィクトルの父)、(後列左端) 三代目リーダー・アダム・ムロチコフスキ

けていて日本語も正確だった。残留ロシア人や朝鮮人は、日本語は片言程度だった。

彼らは3年ほどソ連軍や民生局に徴用された。この間、日本人の軍属や治安当局の尋問に通訳として立ち会いながらも、いつ日本人と同じ運命を辿るか、不安な日々だったという。彼らは長い年月ロシアに統治されていた経験から、ロシア人の行動を決して信用していなかった。案の定、通訳の仕事が一段落すると、ムロチコフスキは、亡命ポーランド人であり、またポーランド人会の会長だったことから、ソ連官憲の取り調べを受けるが、彼の知恵でなんとか解放される。

1948年、この地に流刑になって半世紀振りに、ポーランド人たちはようやく帰国の途についた。しかし、母国に帰国したのは全員ではなかった。ロシア人や日本人と結婚していたり、家族の無事帰国を願ったりしてソ連に残留する者もいた。ドイツ人や亡命ロシア人と結婚した者は、ヨーロッパや米国へ旅立った。

はじめての東京例会「樺太時代に生きたポーランド人」は2014年6月28日(土)午後2時から駐日ポーランド共和国大使館で開催され、55名が参加しました。会場をご提供くださったポーランド広報文化センターはじめ、多くの方々のご支援、ご協力に心から感謝します。



写真(左) 前列中央: 尾形講師、ヴァチンスキ氏 <尾形孝二氏提供> (右) 講演風景 <西島國昭氏提供>